

しのびよる戦時体制

—国民はどのように戦争に熱狂したのか、戦争をどうして阻止できなかったのか—

2019.8.10 荻野 富士夫

はじめに なぜあの無謀な侵略戦争を阻止できなかったのか

・「戦争ができる国」とは：戦争遂行のためにすべてを総動員する体制 2つの意味

文字どおり「戦争ができる国」を実現し、戦争を開始し継続すること

「関東軍」などの暴走による戦争遂行国家へのなだれ込みはあまり想定しにくい

突発的、あるいは謀略的な武力衝突、戦争への可能性

いつでも「戦争ができる国」を構築しておき、常に国内・国際的な緊張を高め、それらをテコとして異論や不満を封じ込める態勢を継続すること

政権・為政者層にとって望ましい「平穏」な状況を継続させるためこと

何のために 「国益」「権益」の追求、復古的保守的国家像・社会像の実現 自らの価値観での社会の統制一元化

・「戦争ができる国」構築に不可欠な国家の暴力装置の整備・拡充

反対するもの、抵抗するもの、不満不平をもつもの、従わないものの強権的排除

現代の軍機保護法としての特定秘密保護法、現代の治安維持法としての共謀罪法

・現在における新たな戦時体制構築 第一次安倍政権における教育基本法「改正」を起点に

2006.12 強行可決 「公共の精神」の尊重、「伝統と文化」の尊重などを追加

直近の「道徳」の「特別の教科」化 「教育勅語」容認・肯定の立場鮮明化

第二次小泉政権の中山成彬^{なりあき}文科相

「先の大戦の敗戦のショックが大きかったことと、戦後のマルキシズム、共産主義の影響で、日本の戦前は非常に悪かったという歴史観がはびこった。……戦後、国民をいじめるのが国家だといわんばかりの風潮もあった。だが、皆国に守られてるのですよね。自分のことだけでなく、国、人のために貢献できる人になることを目標にして生きていくことが大事だ、と教えていくべきではないかな」（『朝日新聞』2005.4.24）

・北星・植村バッシングと 1930 年代後半の思想統制の重なり

天皇機関説事件から矢内原忠雄・河合栄次郎への抑圧

大河内一男「日華事変の十二年七月から十六年ぐらゐまで、この間が思想統制としては陰湿で、いろいろな検挙があつたり、非常に暗い時代」

（「平賀肅学」と戦時の経済学部）『東京大学経済学部五十年史』

和田洋一『灰色のユーモア』（1958）：「奈落の底への地すべりの時代」

雑誌『世界文化』メンバーの一人 1938 年検挙 懲役 2 年、執行猶予 3 年

一九三〇年代後半 「私の実感としては、底知れぬ深い谷間へずるずるとすべり落ちてゆく時代、途中でふみとどまろうとしても、足もとがくずれてゆく、はいあがるというようなことはとてもできない、一人ひとりがもがいても歎いても、結局はみんながずるずるとすべり落ちてゆく、そして事実地獄まですべり落ちていった、そういう時代、破局への一方的傾斜の時代、奈落の底への地すべりの時代だったという気がする」

I 日本人は、なぜあの侵略戦争に無謀にも突っ込んでいったのか

・「戦意」について考えること

戦争を支持し協力した多数者積極的から消極的まで、便乗や付和雷同から止むなく・不承不承まで

戦争を批判し抵抗する意識や姿勢をもちつづけた少数者

戦争の完遂のためには現指導層ではダメだというものも含む

99%以上の戦争支持・協力者のあり方を考えることの重要性

もっともらしい理屈のついた戦争が近未来に勃発した際、99%の側に属する懸念

・「戦意」に対するアメリカ側（戦略爆撃調査団報告 1945 秋冬調査）と日本側（特高）の分析

真珠湾の時点で、日本人は中国との戦争に少しく疲れており、アメリカと闘うことを好んでいたわけではなかった。戦争のニュースに対する彼らの最初の反応は心配であった。しかし、日本の緒戦の勝利のあとを受けて、彼らの精神はいちじるしく高揚した。そのあと、とりわけサイパン失陥後彼らの戦意は瓦解しはじめた。これは、長引いた戦争の疲れの積み重なり、社会不安、消費物資（とりわけ食糧）のますますひどくなる不足、うち続く軍事的敗退、これらのものが抵抗する意志を弱めた結果であった。そこへもってきて空襲が人口の大きな部分に直接の目の前の圧力を加えたのである。戦意は突如として下り坂にはいった

1945.4 特高警察の観測 内務省警保局保安課「最近に於ける民心の動向」

最近に於ける敵の比島及び硫黄島、沖縄等に対する侵寇並に本土空襲の激化等戦局の急展開に伴い、一般民心は戦況の劣勢、戦局に対する不安感より著しく悲観的、敗戦的感情を濃化しつつあり……而も、亦従来より国民感情の底流に存したる厭戦、反戦的気運は漸次表面化し、自暴自棄的、厭戦、反戦的言動乃至は落書投書等の散見、又は敗戦和平の台頭を見つつあり。

1945.10.10 提出 新潟県新津警察署長「米国軍戦略爆撃調査に関する件」(『新潟県史』)

一度大東亜戦争勃発せるや、帝国陸海軍の上げ得たる緒戦の赫々たる大戦果に酔い、国民各層に亘って、「米英何するものぞ」と国民の戦争に対する意気大いに揚り、緒戦期に於ける国民の思想動向も、高低の差こそあれ大東亜戦争完遂の一点に結集せられ……国民各層齊しく今次大東亜戦争は理屈を抜きにして勝てるものと信じ込み居りたるの状況なるが、戦争の長期化と共に国民の思想動向に就いても……底流には和平を希冀する思想が漸次満ち来りつつありたる状況にして、一方本土を主戦場とする本土決戦が不可避なる事実として来るにつれ、国民は戦争の前途に対して一抹の不安を感じ、軍並政府と遊離しつつありたる状態なり

「戦意」把握のための聞き取り調査 45.11~12 全国 男女約 3150 人 41 項目の質問
岩手県水沢町 男性

〔10 一番の弱味は何んでしたと戦時中思いましたか〕

水沢町から多数の徴用工は東京、川崎方面へ送られたが、夫等の徴用工が一ヶ月の半分以上も自分の家へ帰ってきて居り、而も東京や川崎へ帰る時には凡ゆる品物を買ひ集めて、それをあちらで闇で売っていた様な訳で、一生懸命で働かなければならない徴用工がその様な状態では戦力が充実しない、この点が弱味だと思った。そして工場に働いている

人達よりも、家庭の主婦の方が真面目に戦争遂行に協力していた。

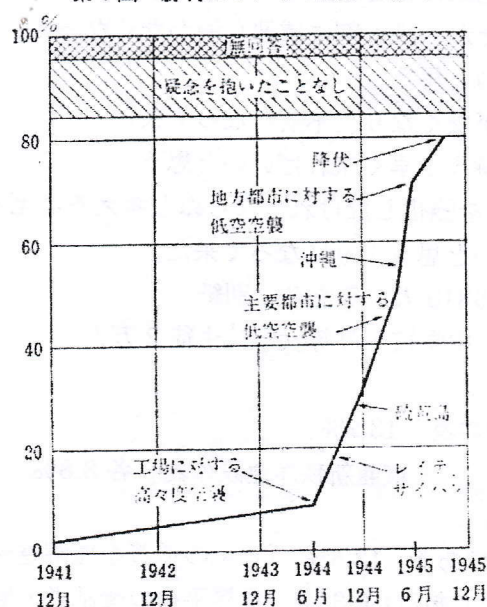
〔16 戦争が進むにつれて、勝つ見込みがなくなったのはいつごろからでしたか〕

今年の三月頃から東京が度々空襲される様になったので、「日本は負けるのではないから」と疑い出した。

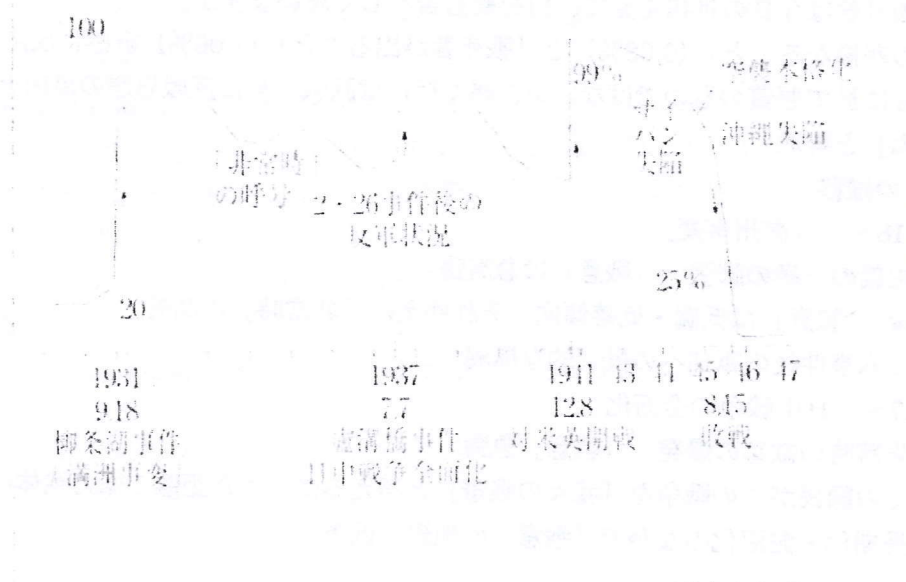
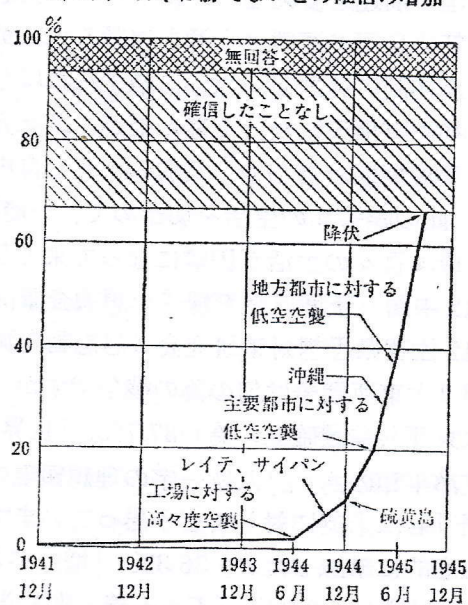
〔17 日本に勝目がない、とはっきり思うようになったのはいつごろからでしたか〕

六月頃だったと思うが、仙台が空襲を受け、而もその時に米軍機が爆弾を落して悠々と立ち去った後で、日本の飛行機が舞上って行ったと云う話を聞いた時には「モウ駄目だ」と思った。

第1図 勝利についての疑念の増大



第2図 日本は勝てないとの確信の増加



・文教当局による学生・生徒の「思想動向調査」

1941.7『埼玉県青年層思想調査報告』青年学校・中等学校上級生の4339人、無記名

第一問 聖戦既に四年、この間我が国内や世界の状況にも大分変化があったが、諸君の気持や考え方にも相当変化があるであろう。自分の気持がどういう風になっているかを反省し、次の諸例の中で、自分の気持に最も近いと思うもの一つを選び、その番号に○をつけよ

- 1、段々冷静になり、吾々は自分の銃後の務を全うしなければならぬと考えるようになった。
- 2、国の前途を憂えるようになり、一生懸命国家に尽さねばならぬと思うようになった。
- 3、初め皇軍の連勝に血湧き肉踊る思いがしたが、段々別に感興も湧かなくなった。
- 4、新体制に協力し、大いに頑張らねばならぬと思う。
- 5、初め有頂天になって喜んだが、段々元気がなくなり、不安になって来た。
- 6、早く事変が済んで、又前のような自由な時代が早く来ればよいと思う。
- 7、此の際吾々の生活を切詰めて、一層国防を強化しなければならぬと考えるに至った。
- 8、段々吾々の生活が困難になって来て苦しいと思うようになって来た。

1941.12 中旬 茨城県教育課『思想調査概況』、9310人 無記名 別紙

1942.12 佐賀県思想対策研究会「思想動向調査」中学校・高等女学校生徒2万人

第一問「大東亜戦争は何の為の戦争ですか」

「大東亜共栄圏確立の為」37.7%、「世界平和の為」13.2%、

「東洋平和の為」・「八紘一宇^{はっしゅういちう}の理想顕現の為」・「大東亜新秩序建設の為」各8.8%

第二問「君は米英に対してどう思っていますか」

「徹底的に撃滅したい」36.3%、「憎むべき国である」13.5%、「日本の道義を理解させ、改悟せしめたい」6.9%、「不正不義・非人道の国である」6.3%、「世界平和の攪乱者・世界人類の敵」6.0%

評「敵愾心の旺盛な反面、敵をも慇懃^{まじめ}に大国民の雅量も窺え、大東亜共栄圏の指導者たる資質錬成の程も認められ頼母敷さを覚えた」

第四問の「君は今日の世相を見て、何を最も苦々しく思いますか」

「戦争の悲惨なること」(0.08%)と「戦死者が出ること」(1.06%) 敏感に反応

「内容に於て悪質のものではないが、悪く行けば厭戦、更に反戦思想の温床とならぬとも限らぬ」と警戒

・「戦意」の推移

1931.9.18～ 「満州事変」

排外主義の一挙の膨張 「戦意」は急高騰

その後、「戦意」は低調・低落傾向 それゆえに「非常時」の高唱

二・二六事件後の軍部への批判的な風潮

1937.7.7～ 日中戦争の全面化

南京陥落時の歓喜の爆発 「戦意」急騰

すべての国民がこの戦争を「我々の戦争」と考えるにはまだ距離 総力戦体制構築へ 戦争の長期化・泥沼化のなかで「戦意」の弛緩・低下

1941.12.8～45.8.15

マレー半島・真珠湾攻撃、連戦連勝に、一挙に「戦意」は沸騰

99%以上の国民が「我々の戦争」ととらえる

その後も「戦意」は高い水準で維持、42年後半以降、弛緩・停滞の兆し

44年「生活」>「戦争」 厭戦・圧戦気分の広がり

6月のサイパン島失陥を大きな転機に「戦意」低下

年末の空襲本格化と統制経済強化により、厭戦・悲観論の増大 「総浮腰の観」

45.6 沖縄島失陥前後から「戦意」急加速に低下

8.15「戦意」維持は25%程度に

99%から25%へ、「戦意」は劇的に推移

・家永三郎『太平洋戦争』（1968年、その後増補版）

第一編 戦争はどうして阻止できなかったのか

第二章 戦争に対する批判的否定的意識の形成抑止

1 治安立法による表現の自由の抑圧 2 公教育の権力統制による国民意識の画一化

・治安立法による表現の自由の抑圧——体制変革・社会変革をめざすものの抑圧排除

変革を防遏し異端を排除する治安体制：法制と機構、その運用

特高警察・思想検察を主翼 補翼としての諸機構

治安維持法を基軸とする重層的な治安法制 治安警察法・出版法令・暴力行為等処罰令・

警察犯処罰令など

II 「戦争ができる国」への到達 「美しい国」と「積極的平和主義」

・安倍政権誕生 「美しい国づくり内閣」：「政府の憲法解釈で禁じられて

いる集団的自衛権の行使については、個別具体的な例に即し、よく研究する」とし、歴代首相として初めて容認に向けた検討に着手する方針を表明。憲法改正に言及し、教育基本法改正案の早期成立を目指す考えも示した。持論の「美しい国、日本」を掲げ、文化や伝統、自然、歴史を大切にする姿勢を強調するなど「戦後レジーム（体制）」からの脱却を意識した保守色の濃い内容となった（『毎日新聞』2006.9.29）

第一次安倍政権の行き詰まりと唐突な放り出し

・安部首相「積極的平和主義」提唱から安保関連法成立へ

2013.9.12「安全保障と防衛力に関する懇談会」の最初の会合でのあいさつが初出

「国際協調主義に基づく積極的平和主義の立場から、世界の平和と安定、繁栄の確保にこれまで以上に積極的に関与していく」その後、国連総会における演説

10.15 衆議院本会議所信表明「単に国際協調という言葉を唱えるだけでなく、国際協調主義に基づき、積極的に世界の平和と安定に貢献する国にならねばなりません。積極的平和主義こそが、我が国が背負うべき二十一世紀の看板であると信じます」「我が国の国益を長期的視点から見定めた上で、我が国の安全を確保していくため、国家安全保障戦略を策定してまいります」

「平和学」の立場からの坪井主税札幌学院大学名誉教授の指摘



ノルウェーのヨハン・ガルトウングの定義 「消極的平和」を戦争のない状態、「積極的平和」を戦争だけでなく貧困や搾取、差別などの構造的な暴力がなくなった状態

安倍首相「Proactive Contributor to Peace」（「率先して平和に貢献する存在」）

⇨ガルトウング定義「積極的平和主義」「Positive Peace」

坪井「Proactive は軍事用語では「先制攻撃」のニュアンスで使われる。米国人は「日本は集団的自衛権の行使容認に踏み切ります」と受け止めるだろう。逆に、和訳によって、日本では「軍事力を行使しない」と誤解する人がいるかもしれない。言葉のマジックだ」
ダブル・スタンダード 「平和主義」は「富国強兵」をカムフラージュするため

2013. 12. 17 閣議決定「国家安全保障戦略」における「積極的平和主義」 国防方針改定

「Ⅱ 国家安全保障の基本理念」の「2 我が国の国益と国家安全保障の目標」

「経済発展を通じて我が国の平和と安全をより強固なものとする」、「海洋国家として、特にアジア太平洋地域において、自由な交易と競争を通じて経済発展を実現する自由貿易体制を強化し、安定性及び透明性が高く、見通しがつきやすい国際環境を実現していくことが不可欠」

国家安全保障の目標

「抑止力の強化と脅威の排除」、「日米同盟の強化」

2014. 4. 1 閣議決定「防衛装備移転三原則」

「武器輸出三原則」をなし崩し的に緩和

5. 15 「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」報告書

「日本国憲法の平和主義は、この「国際協調主義にもとづく積極的平和主義」の基礎にあるものである」

7. 1 「集団的自衛権」行使容認の閣議

決定

9. 19 安保関連法制の成立

外務省説明「いかなる事態においても国民の命と平和な暮らしを断固として守り抜くとともに、国際協調主義に基づく「積極的平和主義」の下、国際社会の平和と安定にこれまで以上に積極的に貢献するための「平和安全法制」が成立しました」（「日本の安全保障政策 積極的平和主義」2016. 3）

内閣官房「積極的平和主義」2014→

国民を戦争に動員する体制の構築

「国益」「権益」のための自衛隊派遣（南スーダン）

ODAの基本方針変更

防衛予算の5兆円越え

反対・批判・異論をあぶりだし、封じ込めるためのさまざまな施策

・特定秘密保護法の強行可決（2013年）・施行（2014年）

念願の国家機密法案の実現 1985年「国家機密法案」などの挫折

「特定秘密」の膨張 国民のアクセス制限・拒否

防衛・外交・テロ関係情報漏洩への厳罰 現在は慎重に運用



・「共謀罪」のめざすもの

治安維持法容認・肯定論 「悪法もまた法なり」

2005「共謀罪法案」審議における南野法相・金田法相の発言

議会通過という免罪符 議会審議から大きな逸脱 「目的罪」限定の無意味化
テロ防止を名目とした社会の監視：かつては「国体」変革の防遏を金科玉条に
「共謀罪」法＝「現代の治安維持法」たる由縁

・「機能性治安法令」の駆使 奥平康弘氏の立川反戦ビラ事件の裁判で弁護側の証言

(『おかしいぞ！ 警察検察裁判所』〔2005〕篠田博之「はじめに」から重引)

「いま日本の社会では、治安維持法とか、治安警察法とか、あるいはひょっとしたら破
防法とかいった特別刑法を作ることは、恐ろしく難しい。それだから、今のところは普
通犯罪法でいかにざるをえない。普通の市民の秩序を守るものを、形として犯罪行為に仕
立て上げて、そして機能的にこれを公安警察的に展開するというのが、今後の社会の
中で大いにあり得る……たまたまこの時期、今御指摘のような事件〔立川反戦ビラ事件〕
が出てきたというのは（略）やっぱり治安維持法がなくても、治安維持法に近いような
格好の、新しい現代的な何かが出てくるという徴候を示すかなというふうに、僕を考え
させている」

法益の対象は異なるが、運用において社会運動・市民運動への抑圧取締りへ拡大

「健全な」運動が「不穏な」ものに一変すると判断するのは取締り当局

歴史的教訓としてのその恣意性 取締り水準の引き下げ

取締り組織の拡充必至 一変するタイミングを発見するために事前からの内偵必須

予防的・行政警察的な運用 地表上に出現する前にえぐり出し 盗聴・検閲などの広がり

人員・予算の増大 それを常時運用していくための新たなターゲットの発見・設定

・テロの「脅威という燃料」：「諜報機関という装置が自らの存在を正当化するために必要とす
る燃料」(ベン・ワイズナー〔スノーデンの法律アドバイザー〕、『スノーデン 日本へ
の警告』)

「社会秩序」を乱すものとして、反対・批判・異論をあぶりだし、封じ込め、逼塞化

反基地・反原発・自然環境保護などの市民運動、労働運動などを標的に

現代警察・司法の強権的姿勢 沖縄・山城さん拘留、埼玉白タク拘留、大垣警察署の

情報提供など

・自民党「日本国憲法改正案」(2012.4.27 決定)

「緊急事態の宣言」 第九八条「外部からの武力攻撃」とともに「内乱等による社会秩序の
混乱」を規定（表向きには「地震等による大規模な自然災害」を強調）

緊急政令の制定

「国民の生命、身体及財産を守るために」 基本的人権の制限可能

第九条 自衛権・「国防軍」の明記

「国防軍に審判所」設置 軍法会議 憲兵の機能

おわりに——閉塞的状況の深まりに抗して

多喜二が直面した困難性の大きさ、暗澹たる思いの深さのなかで 現代に届く未来への展望

多喜二はもっとも深い闇の底にいる田口タキに「光」に向けて進むことを語る——「闇があるから光がある。そして闇から出てきた人こそ、一番本当に光の有難さが分るんだ」

・「胞子の拡散」

「党生活者」の最後：「彼奴等は「先手」を打って、私たちの仕事を滅茶々にし得たと信じているだろう、だが、実は外ならぬ自分の手で、私たちの組織の胞子を吹き上げたことをご存知ないのだ！ 今、私と須山と伊藤はモト以上の元気で、新しい仕事をやっている……」

「蟹工船」の「附記」：「「組織」「闘争」——この初めて知った偉大な経験を荷って、漁夫、年若い雑夫等が、警察の門から色々な労働の層へ、それぞれ入り込んで行った」虐殺後の「戦時体制」の急進展 逼塞状況の深まり 敗戦 その後の「民主化と非軍事化」

「組織の胞子」の発芽 母セキの言葉（1946）「いつか多喜二は、屹度我々の主張することが、必ず実現される時代がくると言うと言ったことがあります、丁度それは今の世のことを予言したようなもの」（『母の語る小林多喜二』）

・「何代がかりの運動」と「火を継ぐもの」への希望

「東俱知安行」のなかの鈴木（「ひげの（鈴木）源重」）「俺達の運動は皆今始められたばかりさ、何代がかりの運動だなア」

「工場細胞」のなかの河田 「俺だちのようなものが、後から後から何度も出てきて、折り重なって、ようやくものになるというようなものだから」

「地区の人々」の副題「火を継ぐもの」

磯野争議・港湾争議での労働者の権利獲得→三・一五事件、四・一六事件での喪失

→「「地区」は昨年の九月十八日頃から、又その様子を変えはじめた——「九月十八日」

と云えば、「満洲侵略戦争」の火蓋が切られた日である」→労働運動の再高揚→弾圧

「兼さん」の復活へ 「ゲンジン争議」による徹底的敗北 平賀による「私」への伝達

「今迄ぼく等のやったことについては、どんなに笑ってくれてもいいです。だが、我々が地区の火だけは消さずに、今こうやってあんたに継げたかと思うと……。」

多喜二に学ぶ「時代」まるごとの把握により、安倍政権の新たな「戦時体制」構築と対峙
多喜二に学ぶ「変革」への意思と実行

眼前の事態に一喜一憂することなく 「胞子の拡散」・「培養土」たらんこと

「何代がかりの運動」への覚悟と希望